

『ペンが挑んだ現場』を学ぶ!

●先輩の生き方から学ぶことは・・・!

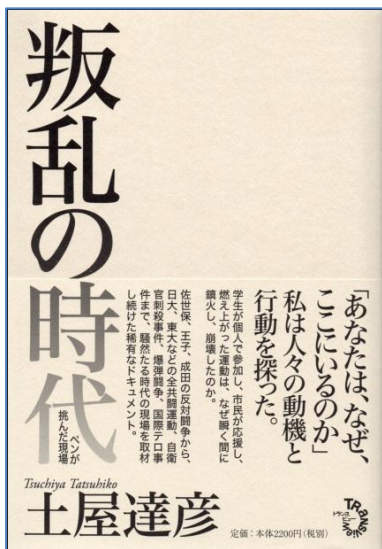
今週17日(木)午後6時半から有楽町の日本外国特派員協会(通称・外国人記者クラブ)のメイン・ダイニングルームにて『土屋達彦・出版記念の集い』が開催されました。土屋達彦さんは、浦和高校の先輩(13回)であり、地域同窓会でお世話になっている方でして、この集いに対して春日部地区浦高会の三輪昭彦会長も発起人の一人として名を連ねさせていただいた関係で、事務局の私も末席に参加させていただきました。

土屋さんの経歴をご紹介させていただきます。



1941年・兵庫県神戸市に生まれ、61年・埼玉県立浦和高校を卒業、66年・慶應義塾大学文学部史学科を卒業され、67年・大森実主宰『東京オブザーバー』入社、68年の米原子力空母佐世保寄港阻止闘争の取材を契機に学生運動の担当となり、日大や東大の全共闘運動、成田闘争などを取材されました。70年に『産経新聞』入社、浦和支局員となられ、72年には『夕刊フジ』編集局報道部に異動、国際テロ事件からロッキード事件までを取材されたそうです。81年産経新聞社を退社、月刊誌の創刊などに携わり、その後、危機管理広報を主とするコンサルティング会社『カイト』を設立し、現在は同社会長でいらっしゃいます。【写真①:土屋さん、2008年春日部地区浦高会賀詞交歓会写真より】

今回、出版された『反乱の時代 - ペンが挑んだ現場』(トランスビュー出版、写真②)は、土屋さんのお父様の記憶から60年安保に対して反対行動を起こした高校時代、さらには全国学生招待会議に没頭した大学時代を綴られた【序章・番記者前史 - 「空白と不安の十年」を超えて-】、週刊新聞『東京オブザーバー』を



を発行する大森実国際問題研究所への入社から始まる【第一章・「学生番記者」になる、第二章<1968>の現場、第三章・日大闘争の明と暗、第四章・東大闘争の現場から、第五章・連合赤軍と自衛官刺

殺事件、第六章・世界規模のテロ】、そして、土屋さんが産経新聞を退社された1981年頃までを綴られた【終章・メディアはどう変わったか】までの約20年間にぎっしりと詰まっているようです。

さて、私は当日30分近く遅参してしまいましたが、ちょうど衆議院議員の亀井静香氏があいさつをなさっておられました【写真③】。土屋さんと亀井氏は、氏が



警察庁整備局時代からのお付き合いがあったようで、第六章の辺り出てまいります。亀井氏のごあいさつの中で、病氣治療中の土屋さんに対して盛んにエールを送っていらっしゃいました。



続いてバイオリニストの天満敦子さん【写真③、天満敦子オフィシャルホームページより】が素敵な演奏を2曲奏でてくださいました。ワインを片手に優雅な気持ちになりました。特に叙情たっぷりに奏でくださった『五木の子守歌』は感動でした。

乾杯のあとは、土屋さんの産経新聞社時代、夕刊フジの時代など多彩な仕事でお仲間だった方々からエピソードなどが披露されました。



【写真④:今回参加させていただいた春日部地区浦高会のメンバー、右から三輪昭彦さん・春日部地区浦高会会長・発起人(15回)、清水幹夫さん・元毎日新聞社論説委員長・発起人(9回)、松本伸一さん・太虚窯主宰(13回)、香田(25回)】

*

土屋さんがこの本を書かれたきっかけは、**昨年の初夏の金曜日の夜、東京・霞ヶ関の首相官邸前で、「(原発)再稼働反対!」と声を張り上げる何万人もの人たちに出会ったこと**だそうです。そこに集まってきた人たちを見られて、40数年前の全共闘運動のういういしさを見出し、あの反乱の時代を整理しておこうと思われたそうです。私も記憶を辿りながら、土屋さんが報道記者の立場で感じられた時代を、もう一度検証させていただこうと思います。